講演概要

「“ いま ” を共に楽しむ認知症ケア ～介護者は俳優になろう～」

菅原 直樹（「老いと演劇」OiBokkeShi 主宰 / 俳優、介護福祉士）

公開ワークショップ形式で参加者の皆さんと共に壇上で演技をしながら、認知症の方とのより良い関わり方について考えました。

認知症の方は、中核症状とされる見当識障害や記憶障害などがあり、ときに私たちから見ると奇妙に思える言動や、小さな失敗が増えていくことがあります。周囲の人々は、その言動を正したり、失敗を指摘したりしがちですが、そうした行為に代わって、受け入れる対応も一つの方法ではないかとお伝えしました。

認知症の方にも感情はしっかりと残っており、言動を正されたり、失敗を指摘されたりすると、感情が傷ついてしまう可能性があります。そのため、認知症の方との関わりでは、論理や理屈にこだわるのではなく、感情に寄り添った対応が大切ではないでしょうか。そうなると、私たちの常識からすると誤りと思われることでも時には受け入れたり、私たちには見えないものをあたかも見たかのように振る舞う「演技」が重要になってきます。ワークショップでは、参加者に介護者役と認知症の人役に分かれ、認知症の方の言動を受け入れる対応と否定する対応を体験していただきました。すると、認知症の人役の方は「否定されると意固地になり、ますます主張したくなる。受け入れられると、この人の話も聞いてみようという気になる」と感想を述べました。また、これは認知症に限った話ではなく、誰しも自分の言葉を頭ごなしに否定され、相手の価値観を押し付けられると反発してしまうものではないか、という話にもなりました。

介護の現場では、家族間でも「介護する側」と「介護される側」という関係性が固定化されることがあります。介護する側が精神的に余裕を失うと、コミュニケーションがうまくいかず、頭ごなしに相手を否定し、自分の価値観を押し付けてしまうことがあります。ワークショップでは、相手がその時どのような気持ちになるかを疑似体験していただきました。また、このように感情を傷つける関わりが、認知症の方の行動・心理症状（BPSD）と呼ばれる、介護への抵抗や徘徊、暴力行為などを誘発することも説明しました。